現地通信

東北タイのラオス難民キャンプ

三谷恭之

昨年10月以降のカンボジア難民大量流入は，タイにおける難民問題をいよいよ困難なものにした。その惨状は世界に報道され，政府の救援資金援助以外には冷淡であった日本の民間にもようやく救援活動に関心が持たれるようになった。

しかし，タイにおけるラオス難民についてはあまり知られていないのではないか。船によるベトナム難民のようなニュース性もないし，その数や現状はカンボジア難民ほど絶望的でないことは事実だが，1975年以来，今回のカンボジア難民流入以前にタイに入ったインドシナ難民総数約30万のうち20万人以上がラオス難民であり，昨年10月末現在，タイ国内難民総数約17万のうち14～5万がラオス難民である。難民たちはタイ各地16カ所の難民センターに収容されているが，そのうちウボン，ノンカイおよびローイの3カ所が大きく各3～4万人を収容，いずれもラオスからの難民である。ただしローイのキャンプにはメオ族が多く，このほか北タイにもヤオ族を主体とするキャンプが5カ所ある。

ローイ難民センターで食糧の配給を待つ子供たち

私はこのうちウボンとローイの難民センターを訪れる機会があった。昨年9月，バンコクでコーネル大学のハフマン教授に会った際，教授が現在ウボンのキャンプで言語調査をしており近々もう1度行くということなので特に同行を許してもらい，バンコクから車で8時間ぶっとばして同キャンプを訪れた。難民センターはベトナム戦争当時の米軍キャンプ跡にあり，ムーン川をはさんだ対岸のワリンには米軍が残した巨大なレーダーがそのまま放置されている。軍キャンプ跡だから道路も整備されており，住民も教育水準の高いラオス人が主体で衛生状態もよく，難民キャンプ中最良のところという。竹造りの家が無数に立ち並び，道路の両側には食物屋，雑貨屋から仕立て屋，パーマ屋まであり，若者たちが終日行きかう巨大な田舎町である。売り家の看板もあった。難民受け入れ国のインタビューや食糧配給日の混雑も何かのお祭りのように見える。いろいろな意味で安心した私は調査の打ち合わせを済ませて，ハフマン教授と別れた。メコン川沿いに車を走らせ，以前は対岸の銃声で今夜は何人殺されたか当てっこしたとか，毎日上流から死体が流れてきて黄色いメコン川が血で赤くなったとかいった話を途中で聞きながら，次はローイのキャンプを訪れた。森を切り開いたようなところで，メオ族が多いせいもあって巨大な山地民集落といった感じである。楽器を吹き鳴らして踊る男に人々が喝采を贈る。女たちが竹筒で水汲みをしている。救援活動をしているアメリカ人に結構楽しそうじゃないかというと，仮設病院と食糧配給所を見せてくれた。カンボジア難民の報道写真に見るような母子が寝ている。片足を失った男が喘いでいる。助かる見込みはないという。以前はもっと多かった。これでもよくなった方だという。私は自分の立場に戸惑いを覚えながらともかく言語調査の打ち合わせをして帰路についた。

その後ウボンにはもう1度行ったが，ローイの方にはまだ行っていない。ウボンで知り合った青年がカナダ行きを希望してバンコクで待機している。バンコクの中継センターはいずれも満員なのであとから来た人々はホテルやゲストハウスにつめ込まれる。彼はいよいよとなるとやはり祖国が忘れられない，家族さえなければ戻って反攻ゲリラに加わりたい，という。同じホテルにローイからメオ族の一団が到着した。山頂を好むからでもあるまいが，ホテルの屋上に泊められた。そこでアメリカ行きを待つという。このちぐはぐさがこの人々の将来を暗示しているように思えてならない。

（京都大学東南アジア研究センター助教授）